研究雑話（83）

障害児教育・動作学誌上実習（一）はじめに：エスプリを育てる！生活の中のわざと知恵（E・セガン、一八四一）。

藤井力夫

これまで、三つの内容についてお話してきました。一、近代市民社会における障害児教育の成立と展開：E・セガンにみる障害児教育創始の背景と指導原理（雑話1-16）。二、現代フランスにおける障害者の教育・福祉事情：一九七五年・障害者基本法と地域保障の実際に関する調査（雑話17-35）。三、人間発達の物質的基礎と障害児教育の内容・方法への視座：A・R・ルリアの神経心理学と自然科学的認識の到達段階（雑話36-82）。いずれも私自身の調査を基礎に、分かり易く本質をついた資料の提示、これを心がけてきました。ただ文章は最小限で、すぐには理解できない箇所があったかと思います。感謝に堪えません。

今回から、「動作学誌上実習」に入っていきたいと思います。人間の諸活動におけるさまざまな動作を対象として、持てる力を最大限に発揮できるための自然なあり方について、お話していきたいと思います。動作の効率を対象とするのではありません。動作に含まれた本質や、習熟過程における特徴、及びその人なりの隠れた工夫、これらについて浮彫にできればと考えています。

表題に記しましたように、「エスプリを育てる！」、まずは、これについてお話したい。「エスプリ」は、語源のラテン語で「風、空気、息」を意味し、現代フランス語で、機知やユーモアに富んだ自立的な批判精神ということです。障害児教育は最初からこの形成を大きな目標にしてきました。人間だけの機能で、これ抜きに近代市民社会は成立しない。身近な出来事をその人なりに処理し、その人なりに価値を形成していく。行為することは同時に、自らをも変革していく。それが人間として、市民として、労働者としての資質を形成するのであり、障害者も例外ではない。こうした立場です。それゆえ、毎日の生活の内容が問われます。「手が突き出た大脳」（E・セガン）というとき、まさに手仕事と知能とが相互作用するような、そんな場面をどのように障害児に提供できるか、これが問題でした。こうした意味合いの一端を理解していただきたく、文章を用意しました。一つは、早期から手当を施せば、これほどまでに重くならなかったであろうに（**表B**）ということ。他は、その年齢にしかできない活動を思い切りさせるなかで、エスプリの形成をはかる（**表A**）とするものです。

（北海道教育大学教授）

A．キーワードは、エスプリ、試してみたくなるこころ、生活のなかのわざと知恵。

エスプリ	l'esprit	(spirit)	：精神、機知
コール	le corps	(body)	：身体、胴体
クール	le cœur	(soul)	：心、魂

彼らは、これまでの**生活**を通じ、不活発で何もしたことがなく、食べるだけでした。

従順や**労働**、彼らはそれが何であるかを知りません。

精神（エスプリ）、彼らはその存在を考えたこともありません。

身体、彼らはそれを萎えさせたままで、食欲が彼らを呼ぶところでしか動かしたことがありません。

心、かれらは、それをほとんどの場合、醜い悪にとって代えてしまいます。

ところが、何人もの者たちが、すでに**身体的**にも、**知的**にも、**精神的**にも人間としての最も本質的な進歩を遂げている年齢に達してしまっているのであります。

（エデュアール・セガン、下記書、p.6）

B．障害児教育事始め：

施療院理事会への報告序文

（1842年1月、Édouard SÉGUIN）

委員閣下

私は、**内務大臣**が私に要請した名誉ある任務を引き受けましたが、課題の困難性を認めないわけにはいきません。私の専門とするところでありますが、それは、公共福祉により養育されねばならない白痴の子どもたちの収容計画と同様、放置され、蓄積されてきたことによる特別な問題であります。それゆえ、**障害された器官のみならず、今日まで、治癒不可能ということで、病気の自然な傾向に放置されてきた問題**を対象としなければならないのであります。

私は、貴下の好意が、私が試みたことにも、為し得たであろうことにも、検討を加えていただけるものと考えました。かつ、私は、貴下のような有能な方々を私の方法と私の努力の判定人とさせていただくという、横柄な高慢をお許しいただけるものと考えました。

委員閣下、**人間性に奉仕するという仕事**をめぐって、私は、序文なしに、過ぎ去ったばかりの3ヶ月間の考察に入りたいと思います。

（エデュアール・セガン『遅れた子どもと白痴の子どもたちのための教育の理論と実践、不治者施療院での子どもたちへの取り組み、最初の3ヶ月間』、1842、Paris、p.1。）